

5.

「このにくい集中豪雨め」

南信濃村遠山中学校二年

M · S

あのおどろしかつた集中豪雨を思いうかべると、ついこの間のように思える。集中豪雨は人々の生命をうばい、家を流し、田畑をうばいどつてしまった。雨はサンサンふり続き、おかげで道路なんか水びたしになつてしまつた。どれどころかバスも通らず、自転車一台も通らない。滝の水はぐんぐん増し、遠山川は真つ黒いどく流となつて、水かさもぐんぐんふえていた。雲は少しも動かず、まだまだ雨はやみどらうもなかつた。かみなりはごろごろなるし、もう気がいらいらしてしまつた。

「大町の提防が切れた。」

「という知らせが耳に入り、私はおどろいた。お昼頃友達と大町を見に行つた。石堂の下の所で見たら、私は思わず、

「ごくり」

とつばをのんだ。

田畑は流され、家は半分水がつき、見るもむざんな姿だつた。私は、こんなにもなつたかと思つくと、大町の人運がかわいどうになつた。下へおりて川のすぐそばでよく大町の方を見ていた。雨がふつていてというのにみんなが真剣になつて、大町のどく流にのまれた家々を見つめるだけだつた。私は大町を見つめて、いるうちに、

「このにくい、集中豪雨め」

と思つた。

みんな思ひ思ひの言葉が出ないらしく、歯がガクガク合わさつて、いるよ

思えた。

田んぼなんかをいっしはっしになつて、水を防いでいる人を見ると、私まで、手伝わすやうな気がしてくる。

「あぶないから。」

といつまゝ大人の人が少しさからせた。その場で一歩も動かず、遠山川を見いつましました。

おかずもろくろく店には売つていなかた。お菓子も一つもなくなつた。二、三日はおいしいおかずもお菓子もがまんしなけれはならなかつた。だが、お菓子やなんかがまんする位なら、まだまだ良い方だ。家が流れてしまつた人達なんかこれ以上に悲しいだろうに。

（三十八年）